

# 河北潟流域新聞



発行：NPO法人河北潟湖沼研究所 2025年2月

## 能登半島地震による河北潟周辺の被害状況

### 河北潟干拓地正面堤防の沈下



沈下した正面堤防（2024年1月7日）

①

河北潟干拓地はマイナス標高のため、堤防がなければ水没します。この地震で河北潟干拓地正面堤防のうち約900mの区間でほぼ堤防が消滅する事態となりました。土嚢により応急工事が行われましたが、潟水の干拓地への流入が止まりませんでした。その後、石川県などが続けて対策をとり、流入はほぼ止まりました。河北潟干拓地では東部承水路堤防も長い区間において沈下が、西部承水路堤防でも一部損壊や沈下が確認されています。

### 正面堤防から河北潟の水が干拓地へ流入



（2024年1月7日）

②

### 防潮堤の沈下



防潮堤の様子（2024年2月18日）

④

### 内灘町大根布付近の堤防の損壊



（2024年1月8日）

③



河北潟と大野川を遮断している防潮堤（2024年1月8日）

⑤

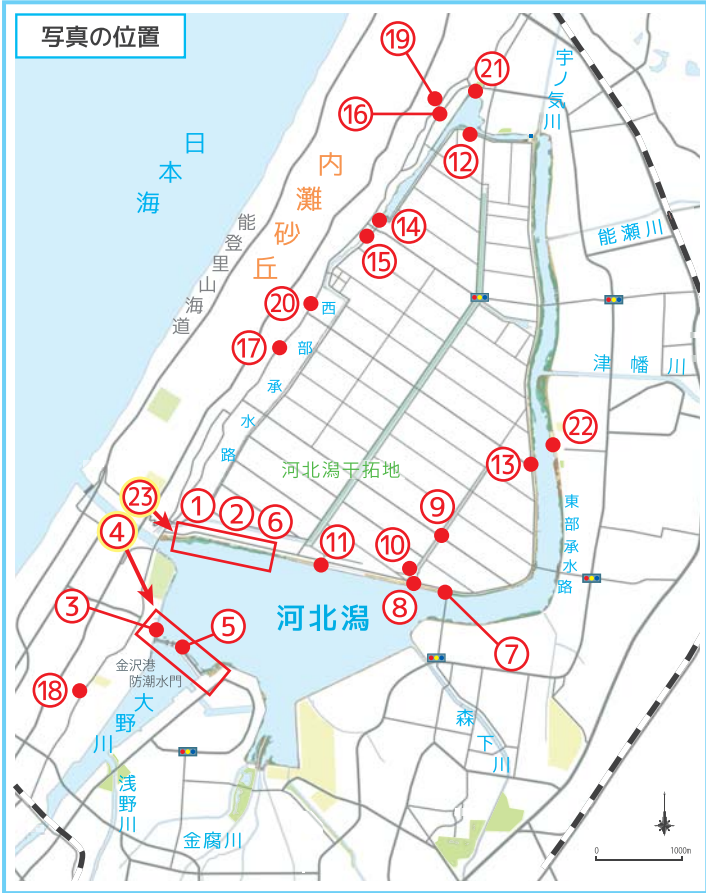
河北潟と大野川を遮断する防潮堤は、河北潟に海水が入るのを防いでいるものです。この堤防が決壊寸前のところでした。撮影時、堤防の海側約150mの範囲には既に土嚢が積まれていましたが、管理用道路は水没していました。この時は河北潟側の水位が高く、崩れた堤防の海側の法面から水がしみだしていました。調査時の水面から堤防までの高さは60cmほどあり、なんとか海水が流入するには至らなかった模様です。

河北潟と大野川を横断する防潮堤の端から上流側、下流側とも150m区間の堤防が大きく損壊しました。この区間は、地震が起こる前から堤防が波により洗掘され、損壊が目立っていたところでした。地震により、もともと弱くなっていた堤防が崩れてしまったものと思われます。1月8日には応急工事が行われており、土嚢が積み上がっていました。

#### 目次

- 1-3 令和6年能登半島地震による河北潟周辺の被害状況
- 4-5 河北潟湖岸域での復興事業への提言 河北潟湖沼研究所
- 6-7 復興事業と自然再生 東日本大震災の被災地より
- 8 河北潟流域で活動する人のお話 11  
～地域の小さな歴史を残し、発信する～ 辺本良治さん

2024年1月1日に発生した能登半島地震は、震源地から70〜100km離れた河北潟とその周辺においても甚大な被害をもたらしました。震度5強から5弱であったにもかかわらず、内灘砂丘の裾部の集落では多くの家屋に被害がありました。また、河北潟干拓地では、道路の寸断や大規模な堤防の損壊が見られました。河北潟湖沼研究所では震災後、直ちに調査チームを充足し、震災直後から被害状況の記録と地震の自然環境への影響について調査を実施しています。



13 東部承水路沿いの道路 (2024年1月4日)



14 西部承水路 室橋上流側 (2024年1月6日)



15 西部承水路 室橋下流側 (2024年1月6日)



6 1ページの写真2の手前側。流入した水が道路上にあふれている。(2024年1月7日)

# 河北潟干拓地



7 才田大橋北詰(干拓地内) (2024年1月6日)

金沢市から河北潟干拓地へ入る唯一の橋、才田大橋では橋自体もダメージを受けたようですが、橋桁より干拓地側が1m以上沈下し、通行できない状態となりました。干拓地内では、このように強固な構造物を道路が横断しているところでは、構造物の前後が大きく沈下して道路が寸断されている場所がたくさん見られました。

写真8は、干拓地の周回道路が暗渠排水路を横断するところですが、1m程度の断面ができていたのがわかります。よく見ると断面上部のアスファルトの層が不自然に厚いのが分かります。干拓地が軟弱地盤であることから干拓後も少しずつ沈下が続いており、段差が生じる都度アスファルトを足していった結果です。



8 金沢排水機場近くの道路 (2024年1月6日)



10 干拓地内の道路 (2024年1月4日)



9 河北潟干拓地南部排水路を渡る道路。大きく陥没した。(2024年3月19日)



12 河北潟干拓地北端の道路。右側にある堤防が大きく沈下した。(2024年1月6日)



11 地面から大量の砂が噴出している。(2024年1月7日)



内灘町西荒屋(2024年1月6日)



かほく市大崎(2024年1月6日)

かほく市大崎から金沢市粟崎町までの内灘砂丘の裾部において広範囲に液状化と側方流動という現象が起りました。被害の程度は一樣ではなく、深刻な被害を受けた地域と被害が比較的軽微だった地域が見られました。

## 内灘砂丘の裾部

かほく市大崎、内灘町、金沢市粟崎町



内灘町鶴ヶ丘(2024年1月4日)

大崎は国営干拓事業の際に西部承水路の築堤のための土砂採取が行われており、土砂採取された範囲と被害が大きかった範囲がほぼ重なっていました。調べていくと被害が大きかった地域は大崎と同様に、過去に地形の改変が行われたところであったり、湖岸の古い水田が宅地化された場所であることがわかりました。

内灘町西荒屋小学校付近は液状化の被害が甚大でした。過去の資料を見ると、この地点は西荒屋の地先に埋立水田をつくるために砂丘が深く掘り取られたところでした。掘削時は湛水して河北潟とつながっていたのですが、その後埋め戻され、小学校が建てられました。

内灘町鶴ヶ丘の砂丘裾部では被害が比較的小さかったのですが、写真18のあたりから潟側では液状化の被害が見られました。1930年の地形図を見ると、このあたりは水田で潟縁の軟泥が堆積した場所であることが推定されます。



内灘町西荒屋(2024年1月6日)



かほく市大崎(2024年1月6日)

## 河北潟正面堤防・地震前後



2019年4月13日



2024年2月18日



2025年1月13日



宇ノ気水辺公園  
駐車場のアスファルトや芝生に亀裂が入っている。(2024年1月4日)

## 河北潟沿岸



津幡漕艇競技場の湖岸。地面が陥没し、水が溜まっている。(2024年2月18日)

# 河北潟湖岸域での復興事業への提言

NPO法人河北潟湖沼研究所

2024年1月1日に発生した能登半島地震により、河北潟湖岸域でも液状化による家屋倒壊被害や湖岸堤防の沈下が広範囲で生じました。NPO法人河北潟湖沼研究所では、発災直後から調査チームを独自に立ち上げ、公益社団法人日本水環境学会の汽水域研究委員会の協力も得て、湖岸堤防の断面測量、植生状態のモニタリング、堤防が破損した場合の水質シミュレーション等に取り組んできました。

12月1日には一般市民に向けた公開シンポジウムを金沢市内にて開催し、それまでの調査結果を公表するとともに、震災復興の中で自然再生に取り組む重要性について参加者と共に議論してきました。

河北潟湖岸域の復興事業においては、特に河北潟湖岸域の自然環境として極めて重要なヨシ群落を中心とする湿性植生の保全と再生に配慮することが必要と考えます。復興事業に関わる行政組織、諸団体においては配慮いただきたく提言します。

## 提言1. 正面堤防の地先のヨシ群落の保全

現在の干拓地堤防等に存在するヨシ群落は、1970年代の干拓事業の築堤により生じてきた二次的自然ではあるものの、現在の河北潟において貴重な半自然湖岸を提供してきました。正面堤防の復旧においては、地先に存在するヨシ群落を保全すべきと考えます。

### ヨシ(葦)って?

イネ科の植物(多年草)です。河北潟では湖岸や水路沿いなどの広いエリアに自生しています。地域によってアシとも呼ばれます。昔の河北潟周辺地域では、屋根材や葦簀など生活の中でさまざまに利用されていました。状態の良いヨシを手に入れるため、人が手を入れて管理する葦場と呼ばれる場所が湖岸にあり、資源として活用されされていました。

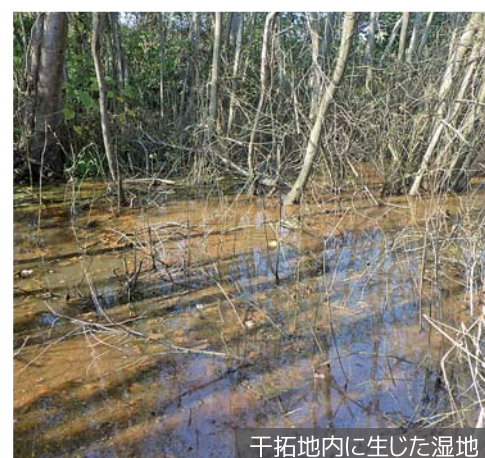
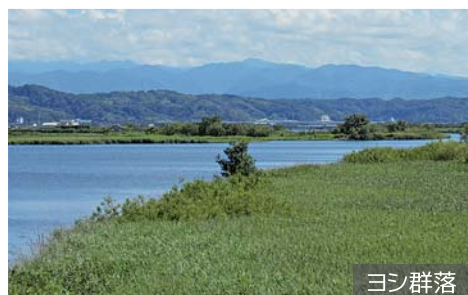
### なぜ保全が必要?

ヨシ群落は、さまざまな野生生物が巣をつくり、ねぐらとしています。たとえば、春に家の軒先に巣を作ったツバメは夏の夜には集団でヨシ群落をねぐらとして過ごしています。「ツバメのねぐら入り」といって、夏の日の入り時刻、ときに数万羽のツバメがいっせいにヨシ原に降りていく光景がみられることもあります。また環境省のレッドリスト絶滅危惧IB類(EN)に指定されているチュウヒは、ヨシ原に巣を作り繁殖する鳥です。その他、オオヨシキリやパン、カイツブリ、サンカンゴイ、ヨシゴイ、ツバメ、オオジュリンといったたくさんの野鳥がみられます。

そして水中のヨシ群落は、小さな魚やエビ類、貝類、水生昆虫等、様々な水生生物の生息場所になっています。ヨシ群落が保全されることは、地域の生物多様性の保全につながります。

## 提言2. 干拓地内に生じた湿地を活かす

震災以降、正面堤防沿いの干拓地内に堤防からの浸透水に由来する湿地が生じつつあります。現在の河北潟周辺には、本来の低湿地帯の面影は金沢川河口域のこなん水辺公園以外に残されておらず、この新たに生じつつある湿地を活かして湿性生態系の保全地区を干拓地内に設け、官民協働型の湿地再生を進めることを提案します。



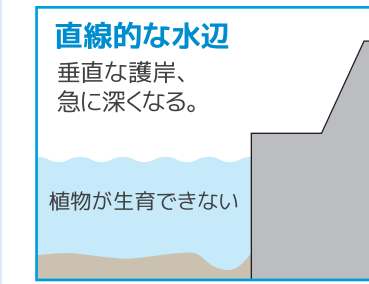
### 湿地とは?

水が豊富に含まれている、または浅い水で断続的にあるいは常時覆われている土地を湿地と言います。水と陸が接する場所です。水は海水、淡水を問いません。泥炭地、川や湖、そして田んぼなども湿地に含まれます。

湿地は水中や泥の中で生活する生物や、それらをエサにする野鳥にとっても大事な場所ですが、世界的にその面積は減少しています。河北潟周辺でも本来の湿地の機能を持つ土地は減っています。湿地もまた多様な生物を支える場ですが、湿地の生態系は一度失われると回復がとても困難なものです。この度新たに生まれつつある湿地を活かし、生態系の回復を試みます。

## 提言3. 大野川の堤防地先における渚の創生

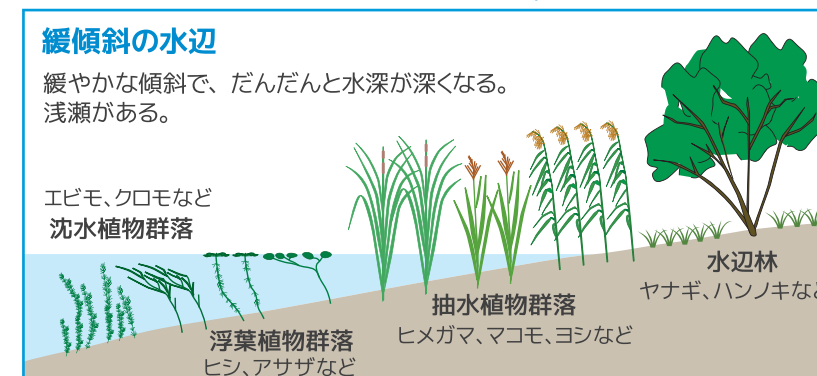
大野川の右岸堤防の地先には、1960年代の築堤後も1990年代までヨシ群落形成されてきました。堤体の沈下に伴い徐々にヨシ群落は消失していましたが、それ以後に覆土を行った湖岸においてはヨシ群落は残っていました。地先への覆土は現在生じている塩水浸透を低減させうる可能性も考えられ、覆土により緩傾斜の湖岸を創生し、渚やヨシ群落の再生と保全を提案します。



### 水辺に親しめる浅瀬を

緩傾斜の湖岸とは、緩やかな傾斜をもつ水辺の事です。河北潟の現在の水辺は、コンクリートで垂直に護岸されたものがほとんどです。急に深くなるため、植物が生育することが難しく、また危険な構造のため、人々が水辺で遊ぶことも難しい環境です。

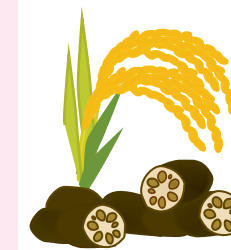
植物は水深によって生育できる種類に違いがあります。緩傾斜の水辺を作り、緩やかに水深が移り変わることで、いろいろな植物が生育する豊かな水域が再生し、また人々が安全に水辺に親しむことができる場となることを期待されます。



沈水植物...水底に根を張って、完全に水に沈んだ状態で生育している植物  
浮葉植物...水底に根を張って茎をのばし、葉のみ水面に浮かべる植物  
抽水植物...水底に根を張って、葉が茎の一部が水面より上に突き出ている植物

## 提言4. 河北潟流域自然再生協議会への幅広い参加を

震災復興はもちろん、ヨシ群落の保全など自然環境の保全と再生には広域的かつ多様な主体が膝を交えて話し合う場が必要です。こうした観点からNPO法人河北潟湖沼研究所は他の多くの団体・個人とともに河北潟流域自然再生協議会の設置を目指す取組を進めており、多くの主体の参加を呼びかけます。



### 協議会って何を?

協議会とは、さまざまな立場の人が集まり、ある議題について話し合う場です。ここでは河北潟流域にすむ個人、農業団体、町会、市民団体、そして自治体などが集まり、河北潟流域の水質や動植物、自然環境についてはもちろん、土地利用方法や身近な自然災害への対策なども含めて話し合う場を想定しています。特に近年増えている水害については、行政区の区分ではなく水の流れてつながる「流域」で話し合うことが、減災につながると考えられます。



## 提言5. 大野川で塩分濃度の低減を

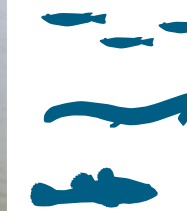
大野川河口に金沢港が建設されて以来、塩水遡上が顕著になり現在の防潮堤と防潮水門が建設された経緯があります。治水対策として大野川の拡張が計画されていますが、拡張は塩水遡上を促進することにつながり、周辺農地への塩害の懸念や河北潟への高濃度の海水の流入の危険性も懸念されます。昭和40年代まで大野川下流に設けられていた潮止めの逆水門のように、下流でも塩水遡上を調整する水門を再建することを、中長期的展望として提言します。

### 大野川の変遷

昔の大野川の河口は、細く狭いものでした。そしてあまり流れもなく、河口に砂がたまりやすい構造で、通水のために河口を掘ることもありました。このため潮の満ち引きが大きい時でも海水がたくさん入ることはなく、塩分濃度は河口から上流にむかって徐々に低くなり、海水と淡水が混ざる「汽水」域が広がっていました。

現在の大野川は、金沢港ができたことにより河口が広く深くなり、海水が入りやすい構造になっています。またかつてあった逆水門がなくなり、海水が遡上しやすくなりました。これにより大野川は河北潟との境である「金沢港防潮水門」まで、ほぼ海水のようになっています。そして防潮水門を境に急に淡水となります。つまり海水から徐々に淡水に変わる汽水域がない状態になりました。

徐々に海水から淡水にかわる塩分勾配のある汽水が復活することで、今は少なくなった汽水域にすむ魚が増える、今は見られなくなったヤマトシジミが再生する等、地域の生物多様性が豊かになる可能性があります。



# 復興事業と自然再生 東日本大震災の被災地より

2011年の東日本大震災で津波により大きな被害を受けた地域では、その後の復興事業で大規模な防潮堤と海岸防災林が整備されました。災害に強い地域をつくるための事業でしたが、一方で再生しつつあった海岸の生態系に大きな影響を与えることとなりました。一定の安全性が確保され、住むことのできる土地をつくることができましたが、かつての海とのつながりやふるさとの風景が失われてしまったとの声も聞かれます。

そのような中で、住民や研究者の取り組みにより工事計画が変更され生態系への甚大な影響が回避された例や、津波で集落が移転した跡地で住民を中心に自然再生の取り組みが継続されている事例もみられます。

河北潟周辺でも能登半島地震からの復興にむけて工事が進められています。その中でより災害に強い土地とするためのハード対策の必要性が指摘されています。しかし強固な構造物や治水施設を整備するだけでは、住みやすく住み続けられる地域とはならないことを東北の事例が示しています。本来災害に弱い低湿地である土地の性質を正しく理解した上で、土地利用の変更も含めた広域での総合的な防災対策やグリーンインフラの観点の導入、低湿地の特性を敢えて取り入れた自然環境の保全・再生・活用を含む柔軟な災害対策が求められます。

被災後、復興の過程でどのようなことが起こるのか、東日本大震災の被災地で活動されている熊谷佳二さん（蒲生を守る会）、遠藤源一郎さん（遠藤環境農園）、黒沢高秀さん（福島大学）の3名に現地でも伺ったお話をともに、各地の復興事業についてご紹介します。



## 巨大防潮堤建設↓位置をずらし干潟を保護

### ① 蒲生干潟（宮城県仙台市）

市民の働きかけで守られた干潟

蒲生干潟は、宮城県仙台市郊外の七北田川河口域に広がる面積約5haの干潟です。全国でも有数の渡り鳥の渡来地で、底生動物や海浜植物が多く見られます。東日本大震災により干潟の環境が大きく変化しましたが、その後徐々に干潟の生態系が回復してきました。

そこに出てきたのが巨大防潮堤建設計画でした。干潟を横断・掘削する形で高さ7.2m、幅40mの防潮堤が建設される予定でした。これに対し、当地で1970年から活動を継続している「蒲生

を守る会」を中心とした市民による計画変更を求める活動によって、工事を進める宮城県が、環境配慮として堤防の建設位置の変更、セトバック（堤防の後引き）を行いました。

防潮堤の位置が当初予定より内陸側に最大で約80m後退し、堤防と干潟の間に数十mの緩衝地帯が生まれました。これにより干潟の後背地の自然がある程度確保されました。現在そこにはヨシやヒメガマが生え、新しく生まれた汽水の堀には多くの鳥類が生息しています。しかし、巨大な人工物である防潮堤によって内陸との自然の連続性が分断された影響が懸念されます。

## グリーンインフラの試行

### ② 緑の防潮堤（宮城県岩沼市ほか）

総合的な環境保全の難しさ

緑の防潮堤は、津波の被害を軽減させるために作られた防潮堤の陸側に盛土をして、そこに樹木を植栽しているものです。

震災被害地の各地で取り入れられ、企業も参加して植栽が進められました。岩沼市では試験的に全長約100mの幅で緑の防潮堤が作られました。当初計画では80m続く予定でした。しかし植栽にはすべて常緑樹（トベラやマサキなど）が使われており、樹木の遺伝的多様性が考慮されずに施行されている点が、問題として指摘されています。

また植栽された樹木は風や塩の影響で、成長がある程度の高さで止まってしまうます。植栽により景観形成や減災といった効果が見込まれる一方で、海岸に特有な生態系の回復には向かないという問題点があります。

東日本大震災後、岩沼市に限らず各地の海岸で防潮堤や海岸防災林が復元、建設されました。多くの場所で堤防に盛土をし、そこにクロマツの植栽が行われています。盛土をするため山を切り崩した山砂が大量に使われ、これにより山が消失するといった事態も招きました。環境への配慮が行われる一方で、別の環境への影響が心配されました。緊急に進められる復興事業の中での難しさが伺われます。



画像: Google Earth



② 緑の防潮堤

名取川

貞山運河

③ 新浜地区

① 蒲生干潟

← 福島県 宮城県 →

## ビオトープで地域の自然を保全・集団移転跡地で

### ③ 新浜地区(宮城県仙台市)

震災前の豊かな自然をとりもどす

新浜地区は、震災により地区全体が甚大な被害を受け、一部は住宅の建築ができない「災害危険区域」となり、移転が行われました。東日本大震災では各地で移転が行われましたが、その跡地の活用方法は公園や緑地、体験農園、交流施設等、地域によって様々です。また、その運営者も外部から募集した事業者であったり、地元住民が中心となっていたりと違いがあります。新浜地区では地域の方が中心となり、大学の専門家も参加したうえで、地域の貴重な自然環境と調和した跡地の活用が進められました。

「カントリーパーク新浜」はそのような中で立ち上げられた団体です。移転跡地に「田んぼビオトープ」、仙台平野の原風景の面影をのこす「水辺ビオトープ」、砂浜海岸植物の保護、増殖を目的とした「砂地ビオトープ」と、3つのビオトープを作り、農業体験や自然観察会の場として活用しています。震災前の豊かな自然を取り戻すこと、農業や自然を活かした新たな交流を生み出すことを目指して活動されています。ビオトープの近くに阿武隈川まで続く貞山運河が流れ、地域の歴史を感じられる場所でもあります。

また新浜地区には、周辺の自然観察や、石碑を見ることが出来る「みんなの木道」や、高い所からの風景を楽しめる木製の「新浜タワー」といったオブリジェクトが各所に設置されています。これはせんだいメディアテークのアートノード事業でアーティストの川俣正さんが作られたものです。新浜地区は地域団体、アーティスト、大学といった多様な主体とパートナーシップを築いて、地域の自然再生に取り組んでいます。

## 砂浜が消えた

### ④ 大洲海岸(福島県相馬市)

渚を埋める消波ブロック

大洲海岸はもともと砂浜が広がっていましたが、震災の10年前より消波ブロックが置かれ砂浜が衰退していったところに、震災後はより多くの消波ブロックが積み重ねられ砂浜が消失してしまいました。砂浜を守るために設置されたものにより砂浜を失う結果となり、砂浜の生態系サービスも損なわれています。

また、堤防の形状が直線的で海側に寄って建設されており、移行帯(エコトーン)といわれる植生の移り変わりが見られませんが、さらに防潮堤の内陸側は山砂が盛られたところに、防災林としてクロマツが植栽されています。宮城県では防潮堤から防災林にかけて一定のスペースが空いており、そうしたところにハマヒルガオなどの海浜植物が自然に定着していますが、福島県ではそのようなゆとりのない形で整備されており、防災林帯に海浜植物の生育が確認されない状況となっています。

## 保安林から保護区へ

### ⑤ 松川浦周辺の干潟 塩生湿地(福島県相馬市)

保全の声に守られた塩性湿地

もともと海岸に防災林があった松川浦周辺は、津波により壊滅的な被害を受けました。防災林の復旧では、当初は山砂で盛土される計画でした。しかし震災後、海岸に貴重な生態系が生まれ、地元からの希少生物の保全を望む声が上がリ、事業担当の農林事務所と林野庁、そして研究者が議論を交わし、塩性湿地や干潟が保護区として設定されることとなりました。

保護区には古湊干潟、大洲再生干潟、グラウンド干潟と3つの干潟が成立しました。これらの干潟は、松林の管理に使われていた既存の水路を残すことで、潮の満ち引きに応じて海水が入りやすいように工夫されています。

グラウンド干潟は、震災で「福島県相馬海浜自然の家」のグラウンドが沈下してできた干潟です。震災直後は地盤が沈下して松川浦から海水が流れ込んでいたものの、徐々に地盤が上がってきたために、海水が入ってこなくなりました。震災後に一度沈んだ地盤が次第に隆起するという現象はほかの場所でも確認されているとのこと、復旧工事においては順応的な対応が必要であるという指摘がありました。



ビオトープ



みんなの木道



新浜タワー

ビオトープに設置された看板

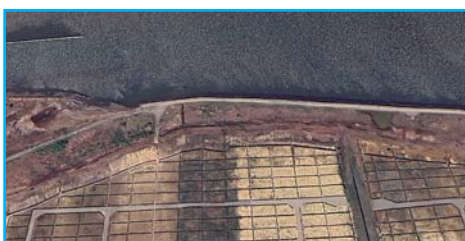


大洲海岸



松川浦周辺の干潟

古湊干潟と大洲再生干潟がある場所はもともと保安林であったため、本来であれば速やかに森林に戻さないといけないのですが、林野庁まで戻して計画変更をすることができたので、湿地のまま保存するという前例が作られました。また、放置したままにすると開発のリスクや荒地地となるリスクが高まりますが、市民グループである「はげっ子倶楽部」などにより調査・観察の場としての活用が進められています。



画像: Google Earth Image©2025 Airbus



画像: Google Earth Image©2025 Airbus



画像: Google Earth



画像: Google Earth Image©2025 TerraMetrics Image©2025 Airbus Data SIO, NOAA, U.S.Navy, NGA, GEBCO

# 河北潟流域で活動する人のお話

河北潟流域に関わる活動をしている人のお話を伺っていきます。

## 河北潟流域で活動する人のお話 その11

なべもとよしはる

### 辺本良治さん 地域の小さな歴史をのこし、発信する



辺本良治さん：1951年内灘町宮坂生まれ。ステンドグラス作家、内灘町文化財保護審議会委員、郷土愛好家。

辺本さんは、ステンドグラス作家として活躍される傍ら、内灘町や河北潟など郷土に関する本を制作されています。能登半島地震後は、内灘町における被害状況を詳細に記録した被災図記を制作、発表されました。生まれ育った宮坂のこと、河北潟のこと、図記を制作したきっかけなど辺本さんにお話を伺いました。

#### 昔の河北潟や宮坂の記憶

目の前に河北潟がある内灘村宮坂で生まれました。河北潟がどんどん変化する時代に育ちましたが、目に焼き付いているのは埋め立ても何も始まらない頃、小学校3年生の直前までの広い河北潟。祖父が船に乗せてくれ、漁に連れていかけてくれたことが記憶にあります。それと海に板を持っていて、波が来ると板の上に腹ばいになり、サーフィンのように波乗りをしていたこともあり、それを教えてくれたのは父親でした。

一般的には道路があり、コンクリートの土留めなどがあり河北潟になるでしょう。私が3歳ごろの記憶とありますが、その頃は道路の脇側にすべコンシが生え、土留めも何もない状態で河北潟になっていました。集落があつて、道があつて、河北潟との間のクッションにヨシがあつた。その中に虫や魚がいて、エビもつたしウナギもつりました。

昭和33年か34年頃、埋め立てが進む中で、河北潟がどんどん汚れてゴミが溜

まっていきました。おそらく金沢から流れてきていたのではないかと思えます。なぜかというところ、八田町の方に「昔おじいちゃんや河北潟で漁をしていたら、遭難して宮坂に流れついた」という話を聞いたからです。そういう水の流れがあつたんでしょね。

もうひとつ覚えていたのが、危険な「液状化遊び」。当時はそういう名前は付いていませんが、河北潟が埋められていく中で、砂丘みたいなものができていたのですが、その上をぼんぼんと飛び跳ねる遊びです。ふわふわとして楽しかったです。そして飛び跳ねていると、そのうち一か所が抜けて腰のあたりまでずぼんと埋まる。子どもながらに危険な遊びだという事はわかっていたので、長い棒を横にして両手で持ち、それに引っかかって全身が埋まらないようにしていました。そして引っかかったところを友達に引き上げてもらう。だから絶対に一人でこの遊びはしませんでした。僕はこういう地面がやわらかい場所に住んでいるんだな、と思っていました。

高校の頃から住んだ家は、もともと河北潟だった所を地元の人が砂で埋め立てた場所に建てられた家です。だからよく揺れました。地震など何もなく揺れ、徐々に地盤沈下していきました。

高校卒業後、東京でグラフィック関係の会社に就職しましたが、父が亡くなったことをきっかけに内灘へ戻りました。知人にステンドグラスを作っている人を紹介してもらい、金沢で仕事をしながら、毎週末、車でその方のある奈良県まで通い、学び始めました。そうしてステンドグラスを作れるようになったのですが、なかなか仕事がありませんでした。「夢色透明」という喫茶店をやっていた時期もありました。一面にステンドグラスがあり、河北潟も眺められる、こだわりの店。でも都会の作家達が面白いデザインのステンド

#### ステンドグラスの世界へ

グラスを次々と作っているのを見て、ステンドグラスに専念しようと、お店は閉店しました。ちょうど建築ブームもあり、ステンドグラスの大きな仕事が増え、舞い込むようになり、60代半ばまで来りました。

グラスを次々と作っているのを見て、ステンドグラスに専念しようと、お店は閉店しました。ちょうど建築ブームもあり、ステンドグラスの大きな仕事が増え、舞い込むようになり、60代半ばまで来りました。

#### 小さな歴史を残すために

その頃になると、建築ブームも落ち着いて時間に余裕もでき、現在工房がある白帆台（内灘砂丘の上のほうにある地区）に引っ越ししました。その時に気が付いたのですが、ほとんどの方々は引っ越してくる時に昔の写真を捨ててしまっています。お父さんやお母さん、家族の写真、そういったものだけ残して、後は全部処分してしまつて。まじいなあと思いました。

昔の宮坂の写真がまだたくさんあり、これを一部だけでも残さないとけない、と最初に作った本が2018年に発行した「宮坂のこと」です。掲載されている写真は、地域の皆さんが筆筒の奥や菓子箱なんかに入れて保管していたものです。今やろうとしてもおそろくできないでしょう。あの時にやっておいてよかったです。

#### 被災図記プロジェクト

2023年の10月頃、内灘町の倉庫に保管されている写真のデータ化作業をしていました。整理をしなければ、何の写真かわからなくなります。そしてクリスマス頃、現在西荒屋小学校がある場所、工事している写真を見つけた。地面を掘り返し、そこが湖のようになっています。その後、そこに小学校や住宅が建てられていきます。内灘砂丘の下にある地区に住む友人と、「ここで何かあつたら危険だね」という話を大みそかにしていました。

そして1月1日、能登半島地震が発生しました。驚いて外に出て、宮坂は大丈夫かと丘の下の方を見ると、つぶれているような家も見えず、大丈夫だったんだな、と安心しました。夜6時ごろ、下にいる友人から電話があり「うちは2メートルも3メートルも隆起した」と言われました。嘘だろうと思いつつ後見に行ったら本当に隆起していました。直感的に昔湧き水や井戸のあつた場所

が関係しているのでは、と思いました。あちこち電話したところ、（かほく市）大崎も粟崎も昔井戸があつたところの被害がひどいということでした。昔、井戸だつたところを今は使用しないで閉じています。これが被害の大きくなった原因だと思つたことが、あの図を作ったきっかけです。誰かが発信しないとけないなということで作りました。そうしたらずいぶん反響がありました。

被災図記の写真は、友人知人からもらったものです。その後、被災後の写真を集めています。今はスマホで皆さん写真を撮っておられるはずで、被災した自分の家も撮っているでしょう。これから色々な方に提供を呼びかけ、何年先になるかわかりませんが、最終的には地域の方たちが、前を向いていけるような形で発表をしたいと思っています。

#### 内灘・河北潟のこれから

開発は慎重に、歴史を再考したうえでしてほしい。その時には資料になるものが必要。ただ残せと言つても無理があります。後世のみなさんにわかつてもらえる仕事を残すことが、今生きている人たちの一つの仕事かなと思います。素人なりに残していきたいと思います。

歴史を見ると、その土地に適したものは、残っています。それをうまく現代風にアレンジしていくと、いい地域づくりができるんじゃないかなと思います。内灘は小濱神社とか砂丘や河北潟の自然がある程度残っています。そういうものをうまく生かして、いい町作りをしていくのがベターかなと思います。みんな平等に、生き生きと暮らせるような地域になって欲しいなと思います。

（聞き書き・番匠尚子／河北潟湖沼研究所）



辺本さんが制作された被災図記の一部。地図上に内灘町の被害状況や写真等がまとめられています。全体を下記QRコードよりご覧いただけます。（河北潟湖沼研究所ホームページ内）



#### 河北潟流域新聞と一緒に作りませんか？

紙面づくりに参加いただける方を募集しています。河北潟流域の自然環境、環境問題、自然と人との関わり、生きもの、植物、昔の暮らし等にご興味がある方、ぜひご参加ください。特別な技術や知識等は必要ありません。活動日時等は相談して決めていきます。河北潟湖沼研究所までお問い合わせください。



河北潟湖沼研究所ホームページ



Instagram



X



Facebook



河北潟流域ウェブサイト



ご感想投稿ページ

河北潟流域新聞 第7号 2025年2月発行 制作: NPO法人河北潟湖沼研究所 〒929-0342 石川県河北郡津幡町字北中条9-9 E-Mail: info@kahokugata.sakura.ne.jp

\*河北潟流域新聞7号の制作にあたり「未来につなぐふるさと基金」助成金を活用しています。